会長挨拶

Ito Masakatsu
北海道技術士センター　会長　伊　藤　昌　勝

40 年前と言えば、丁度、高度成長経済が軌道に乗った時分である。院生の身であったが、正直、技術士のギの字も知らなかった。中学以来、日本は国土は狭く資源も僅少、その上人口は過剰と教わった。情けない国に生まれたとの思いが強く、世間が囃す経済成長も俄かには信じられないでいたことを記憶している。ともあれ、今は経済大国。少し違う角度から、我々の立ち位置を考えることで、40 周年の挨拶に代えたい。

山青く、水清し

機会あって、新幹線と高速バスでスペイン南部を垣間見た。「耕して天に至る」とは、棚田や段畑を言うが、車窓の風景は「オリーブを植えて天に至る」である。しかも、一面、オリーブ以外草木一本たりとも見当たらない。熱心な草取りの功でないことは、耕地が礫混じりに置かれていることで分かる。地味と気象がオリーブ以外を受け付けないのだ、と見た。

帰途、成田からのリムジンバスは千葉の田園を通る。田園ならずとも道路脇にさえ草木がムッと繁茂している。日本で農作業といえば、雑草との闘いである。それは道路も河川も同じ。我々は、十分な降水量と適度な気温に恵まれた国土に棲んでいる。災害列島を憂えるばかりでなく、唱歌の「山は青きふるさと、水は清き古里」を、改めて噛み締めたいものである。技術とは、この恵みを更に深め高めて行くことだと思う。

百代の過客

芭蕉になぞらえれば、歴史もまた百代の過客であると思う。中世に下ってからでも、スペインは 800 年にわたってイスラム圏に置かれ、長い回復の戦い（レコンキスタ）の後カトリック社会を得ている。さりながらも、各地のモスクは破壊されずにキリストの聖堂として、実に上手に利用されている。或いは、合理主義に基づく技術者のアイディアだったかもしれない。

旅行中に CNN で、恐らくは第 127 代として即位される親王殿下ご退院のニュースが流れた。翻れば、今年は初代即位から 2,666 年目に当たる。この長い営みの中で、各地の社宮には神話の神々が祀られて来ている。そして、現代技術の粋たるトヨタもホンダも、違和感無くこの神々たちのお祓いに頭を垂れる。違和感が無いのは、古来、多くのワザゴトが神事として執り行われてきたことと無関係ではなかろう。何れにしても、これほど長い歴史を語れる国はない。共同体を大事にする人々の思いが織成し引継がれて来た賜物である。この脈々たる恵みこそが、幾多の技術のイノベーションを生んできたのだと思う。

根性と誇りと信念

漫画家の松本零士さんは、人には誰でも「根性・誇り・信念」があると言う。意識しているかどうかは別として、実はオレにもオマエにも。大切なことは、これを巧みに引出し高めることだとも言っている。遠い昔から、匠や職人達はそうして来た。現代は、ベテラン•中堅•新人或いは異業種にいる者達が円滑なコミュニケーションを重ねることでそれを達成しているのではないか。技術士センターは、十分その役割を果して来ていると思う。

40 周年を機に、センターは技術士会（北海道支部）へ統合することで脱皮を図る。脱皮とは新しい成長のスタートである。会員各位の「意地と誇りと信念」に一層の磨きがかかり、科学技術立国の確かな担い手であることを強く期待するものである。